



ヴァージニア・ウルフとマーガレット・アトウッド の創造空間 — フィクションの構造と語りの技法

中島, 恵子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6152号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006152>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式3)

論文審査の結果の要旨

論文要旨

氏名 中島 恵子

専攻 グローバル文化・言語コミュニケーション

指導教員氏名 米本 弘一

論文題目

ヴァージニア・ウルフとマーガレット・アトウッドの創造空間
—フィクションの構造と語りの技法—

論文要旨

ヴァージニア・ウルフとマーガレット・アトウッドは共に創作に関わるショートフィクションを書いている。ウルフは実験的技法の習作(sketch)として生前に発表した唯一の短編集 *Monday or Tuesday* (1921)でモダニズム文学のマニフェストと言われる *Modern Fiction*で目標とした既成の文学形式とは異なる技法による新たな実験的作品を実践している。テキストはスーザン・ディックが編集した *The Complete Shorter Fiction of Virginia Woolf*を使用した。また同様に、マーガレット・アトウッドも創作についてのメタフィクションを *Murder in the Dark*(1983)、*Good Bones and Simple Murders*(1994)、*The Tent*(2006)の三つの短編集に収録している。これらは著作に関する実験的な文学技法の模索についての3部作と考えられる。ウルフが創作の目的を意識の流れを使ったレトリックによる内面描写を、枠組み構造(frame)や映画撮影技法(cinematography)といった斬新な視点から構築したのに対し、アトウッドは神話、伝説、民話、バラッド、おとぎ話、世界の名作などをベースに、パロディとしての現代版を構築している。対話形式やパッチワーク、詩的散文など斬新な技法による現代的フィクションを数多く執筆している。二人の作家の特徴は、膨大なエッセイや評論の数にも見受けられる。ショートフィクション研究の基盤として、ウルフの文学的エッセイとアトウッドのエッセイ、インタビュー、長編エッセイを分析し、それぞれの作家の文学的スタンスを考察した。ショートフィクションに関しては、ウルフとアトウッドが共に既成の文学的ジャンルを解体し、エッセイフィクションを始めとする斬新なレトリックでどのカテゴリーにも分類できないハイブリッドな作品群を創出している点に注目し、比較分析を試みた。近年完成された *The Essays of Virginia Woolf*と *Negotiating with the Dead: A Writer on Writing*を援用し、二人の作家のショートフィクションに凝縮された形で表現された実験的技法、多重化された言葉の意味、語り、視点、入れ子式構造、エッセイフィクションなど、これまで余り研究されていないウルフとアトウッドの実験的ショートフィクションを比較分析し考察した。序で先行研究、ウルフとアトウッドの創作活動の背景、第1章と第2章では、ウルフとアトウッドのエッセイ、第3章と第4章はウルフとアトウッドのショートフィクション、第5章は、語りの技法と視点—ウルフとアトウッドのレトリック、人物創造—性格描写に関するメタフィクション、多様なレトリック、ハイブリディティ—ジャンルの解体と融合という項目で比較分析を行った。二人の作家は顕微鏡のようにミクロの世界を覗き込むと同時に、望遠レンズで眺める宇宙の領域を捉えている。以上、この論文では二人の作家のレトリックと創造空間を主題とし考察した。

氏名	中島 恵子		
論文題目	ヴァージニア・ウルフとマーガレット・アトウッドの創造空間 —フィクションの構造と語りの技法—		
判定	合格・不合格		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長	教授	野谷啓二
	委員	教授	西谷拓哉
	委員	千葉大学 教授	玉井 暲
	委員	教授	米本 弘一
	委員		
要 旨			
<p>本論文は、20世紀前半に活躍したイギリスの小説家ヴァージニア・ウルフと、カナダの現代作家マーガレット・アトウッドの短編小説のフィクションの構造と語りの技法を比較、分析したものである。中島恵子氏は、ウルフの短編小説はこれまでまとまった形では研究されておらず、アトウッドの短編も難解さゆえに、わが国のみならず英米でもあまり研究されていないので、両者を比較する研究は重要な意味を持つものであるとしている。</p> <p>論文の冒頭に置かれた「序」では、この二人の小説家の短編小説に関する先行研究をまとめ、本研究の目的と意義が述べられている。また、20世紀初頭の「意識の流れ」の手法を中心とするモダニズム文学の潮流と、現代カナダ文学の歴史的、社会的背景が概説されている。</p> <p>本論文は5つの章で構成されており、第1章と第2章では、短編小説の分析の前段階として、二人の小説家が書いたエッセイや評論などについて考察している。第1章では、ウルフのエッセイ、評論の中から11作品を取り上げて分析している。中島氏は、これらの作品は単なるエッセイではなく、ジャンルを越えてフィクションの領域に入っていく、ハイ</p>			

ブリッドな性質を持つものであり、のちに書かれる短編小説、さらには長編小説へとつながる様々な要素を含むものであると主張している。第2章では、インタビューでのアトウッドの発言、過去の文学作品に関する評論集『死者との交渉』、特にアトウッドがウルフの作品に言及したエッセイを考察の対象とし、現実とフィクションとの関係やメタフィクションなど、作品の構築に関する諸問題、アトウッドの作品の下敷きとなっている従来の文学作品の形式について論じている。

本論文で中心的な位置を占める第4章と第5章は、ウルフとアトウッドの短編小説についての考察である。第4章では、ウルフの主要な短編8つを取り上げて詳細な分析を行っており、中島氏は、これらの作品は、意識の流れの手法による内面描写、枠組み構造や映画撮影技法など、既存の文学形式とは異なる技法を使った実験的な試みであると述べている。第5章は、3つの短編集に収録されているアトウッドの作品を分析しており、アトウッドは、神話、伝説、民話などの伝統的な文学形式や先行する時代の文学作品に基づいて、対話形式やパッチワーク、詩的散文やパロディなど、斬新な技法を駆使した現代的フィクションを構築していると、中島氏は主張している。

最終章である第5章では、ウルフとアトウッドの短編小説に見られる語り技法の特質が、視点、メタフィクション、ハイブリディティなどをキーワードとして比較、分析されている。中島氏は、この二人の小説家の短編小説は、文学作品の創造過程に深く関わるものであり、既存の文学形式とは異なる技法を用いた実験的作品であると述べている。つまり、ヴァージニア・ウルフとマーガレット・アトウッドは、作者が作品を創作する行為自体を非常に強く意識していたという点で共通しており、共に従来の文学のジャンルを解体し、融合することによって、新たな形式を生み出そうとしているというのが、本論文の結論である。

論文全体を通して総合的に評価すると、数多くの問題を同時に論じようとしており、同じような内容が繰り返されて冗長な部分があるため、やや論点が鮮明ではないという印象を与えるが、本論文は、作品の緻密な読みに基づく実証的な研究であり、着眼点も斬新なもので、独創的な論考となっている。特に、従来あまり研究されてこなかったウルフとアトウッドの短編小説を比較することにより、二人の作家の創作技法に関して重要な知見を示すものとして価値があると認められる。よって、本委員会は全員一致で、学位申請者の中島恵子氏は、博士（学術）の学位を得る資格があるものと認める。

なお、中島恵子氏は以下の査読付き論文4編を公刊している。

中島恵子 「真実の「言葉」を希求して—V. ウルフとM. アトウッドの短編とエッセイ—」、『イギリス文学のランドマーク』、大阪教育図書、2011年11月、pp.309-20.

中島恵子 「ヴァージニア・ウルフのエッセイとフィクション—ハイブリッドな創作技法—」、『大阪成蹊大学マネジメント学部研究紀要』第9巻第1号、2012年3月、pp.143-67.

中島恵子 「マーガレット・アトウッドの語り技法—メタフィクションとしての短編小説—」、『カナダ文学研究』第20号、2012年12月、pp.89-104.

中島恵子 「ヴァージニア・ウルフのショートフィクション—「青と緑」における色彩と水のイメージ—」、『大阪成蹊大学マネジメント学部研究紀要』第10巻第1号、2013年3月、pp.149-58.